言語文化学科

ドイツ語フランス語圏言語文化コース

フランス語圏言語文化領域

サッカーと排外主義について

—メディア化されるサッカーにおける人種差別への闘いと植民地主義—

文学部 2024 年度

A19LA073

すずき たつや
鈴木 辰弥

目次

第1章 問題提起.....	1
1.1. 近年のサッカーにおける人種差別の事例.....	1
第2章 メディアとサッカー.....	5
2.1. サッカーと「相互受動性」.....	6
2.2. サッカーは関心を引き、本質を隠す—「サッカー戦争」の事例.....	9
2.3. サッカーが果たした役割.....	12
第3章 サッカーにおける人種差別問題への解決策（陣野俊史著『サッカーと人種差別』を中心に）.....	13
3.1. 陣野による議論.....	14
3.2. 「人種差別の歴史を知るべき」.....	15
3.3. 「コスモポリタンになるべき」.....	18
3.4. 「アイデンティティを持たない」ことは解決策なのか.....	21
第4章 カランブーの事例.....	25
4.1. クリスティアン・カランブー.....	25
4.2. カランブーの「カナク文化」.....	30
4.3. 1998年W杯優勝における「民族融合」の歓喜とその後.....	32
4.4. カランブーの事例から陣野による議論の再検討.....	41
終章 まとめと考察.....	43
参考文献.....	49

第1章 問題提起

1.1. 近年のサッカーにおける人種差別の事例

2014年3月8日にサッカーJリーグ1部所属クラブの浦和レッドダイヤモンズ（以下、浦和レッズ）のサポーターが「JAPANESE ONLY」という垂れ幕を掲げた。これは「日本人のみ」という意味にとることができ、したがって外国人を排斥するメッセージとして捉えられる。これは人種差別とは言い難いが、このようなスポーツにおける外国人排斥は、排外主義的な行動として人種差別問題と通底する部分もある。日本ではサッカーにおける人種差別問題や排外主義問題は欧米諸国に比べて表立って取りざたされてこなかったが、この出来事は大きな問題として報道され、その後も議論を巻き起こした。Jリーグはこの行為に対して、浦和レッズに同年3月23日の対清水エスパルス戦を史上初の無観客試合にし、さらに問題の横断幕を掲げたサポーターグループ約20人を無期限入場禁止にするといった制裁措置を取り、試合前には浦和レッズの阿部勇樹主将が、次のような「差別撲滅宣言」を読み上げた。

「宣誓、僕たちは人種、肌の色、性別、言語、宗教、もしくはその他のいかなる理由による差別も認めないことを宣言します。サッカーは、スポーツや社会から差別を撲滅する力を持っています。私たちはサッカーを通じて結ばれた仲間と、共に差別と闘うことを誓います。

2014年3月23日、浦和レッドダイヤモンズ 阿部勇樹¹

¹ URAWA RED DIAMONDS OFFICIAL WEBSITE 「差別撲滅に向けて 阿部勇樹」
<https://www.urawa-reds.co.jp/topteamtopics/%E5%B7%AE%E5%88%A5%E6%92%B2%E6%BB%85%E3%81%AB>

このように「差別撲滅宣言」の一部には、「サッカーは、スポーツや社会から差別を撲滅する力を持っています」とあるのだが、サッカーはどのように差別を撲滅するのだろうか。現実には、逆に差別を助長するような力を持ち、スタジアムはその力が発露する場所になっていないだろうか。

実際、こうしたサッカーの試合における排外主義的行為は世界各地で見られる。同じく2014年のスペインサッカー1部リーグの試合では、FCバルセロナに所属するブラジル代表のダニエウ・アウベスが観客からバナナを投げつけられるという事件が起きた。また、ダニエウ・アウベスが、それに抗議する意味をこめて、試合中に投げつけられたバナナを食べた動画は世界中に拡散され大きな反響を呼んだ。最近では、2023年5月21日にスペイン1部リーグ（ラ・リーガ）のレアルマドリード対バレンシアの試合で、バレンシアファンがブラジル代表のヴィニシウス選手に対して、暴言を浴びせたり、猿の真似をするという人種差別行為が発生した。行為を行った3人には懲役刑が課された。BBCによると、スペインのサッカーの試合での人種差別行為で有罪となるのは史上初であった²。ヴィニシウス選手は2023年5月22日、自身のInstagramで次のようなメッセージを載せている³。

Não foi a primeira vez, nem a segunda e nem a terceira. O racismo é o normal na La Liga. A competição acha normal, a Federação também e os adversários incentivam. Lamento muito. O campeonato que já foi de Ronaldinho, Ronaldo, Cristiano e Messi, hoje é dos racistas. Uma

%E5%90%91%E3%81%91%E3%81%A6-%E9%98%BF%E9%83%A8%E5%8B%87%E6%A8%B9/ (2025年2月17日閲覧)

² BBC Sport《I'm a tormentor of racists - Vinicius Jr on jailed abusers》

<https://www.bbc.com/sport/football/articles/c977plv56d9o> (2025年1月11日閲覧)

³ ヴィニシウス選手Instagram投稿文 (2023年5月22日付)

https://www.instagram.com/p/CshKhcAo9K_/?igsh=MXU5cHplb2ZyYW5mNA== (2024年10月1日閲覧)

nação linda, que me acolheu e que amo, mas que aceitou exportar a imagem para o mundo de um país racista. Lamento pelos espanhóis que não concordam, mas hoje, no Brasil, a Espanha é conhecida como um país de racistas. E, infelizmente, por tudo o que acontece a cada semana, não tenho como defender. Eu concordo. Mas eu sou forte e vou até o fim contra os racistas. Mesmo que longe daqui.

「初めてでも、2度目でも、3度目でもない。人種差別はラ・リーガでは普通のことだ。コンペティションはそれが普通だと思っているし、連盟もそうだし、対戦相手もそれを奨励している。とても残念だ。かつてロナウジーニョ、ロナウド、クリスティアーノ、メッシのものだったリーグは、今や人種差別主義者のものだ。私を歓迎し、私が愛する美しい国が、人種差別主義者の国というイメージを世界に輸出することに同意してしまった。同意しないスペイン人には申し訳ないが、今日、ブラジルではスペインは人種差別主義者の国として知られている。そして残念なことに、毎週起こるあらゆる出来事のせいで、私はそれを擁護することができない。そうだね。でも、私は強いから、人種差別主義者にはとことん対抗する。たとえ遠く離れていてもね」
(筆者訳)

このようにヴィニシウスは人種差別を普通のことだと述べ、そして最後に自分はそれに「とことん対抗する」と述べている。しかしその後もサッカーにおける人種差別的な暴力行為は後を絶たない。

もちろんスポーツの中で人種差別的行為が起こるのはサッカーに限る訳ではないが、サッカーは世界的に人気のあるスポーツであり、ワールドカップなどの世界大会では、何億人もの人々が観戦する。サッカーのような観戦者の数が多いスポーツはマスメディアによって報道される機会も多く、インターネットや SNS を通じてそのスポーツに関わる情報が拡

散される。あらゆる国においてサッカーは関心を持たれるスポーツでもあるために、社会的影響力が大きく、そのためにこの人種差別問題も注目され、しかるべき解決策が必要であると認識されている。

さらに国が違うだけで、サッカーを取り巻く情報の種類も変わっていく。サッカー関連の情報の大半がサッカー選手のプレーや試合結果で占める日本より、フランスでは、もちろん試合結果なども注目されるが、サッカーにおける人種問題が数多く取り上げられ、社会の様態とも重ね合わせて考えられることもしばしばある。それはサッカーがサッカーというゲーム、スポーツの枠には収まりきらず、社会の状態がスタジアムに表れ、またサッカーが社会に影響を与えていくと考えられているからだと思われる。本稿でもいくつかフランス語の文献を用いているが、そこで問題視され、取り上げられている中身は、日本では語られることのないようなサッカーをとりまく人や社会の姿を映し出されているのではないだろうか。

そこで本論文では、サッカーにおいてなぜ人種差別が起き、そしてどういった解決策が提言されているのか、そしてその解決策を検討していきたい。続く第2章では、サッカーとメディアの関係について、哲学者スラヴォイ・ジジエクの造った概念である「相互受動性」や、ホンジュラスとエルサルバドルの戦争である「サッカー戦争」を分析しながら、サッカーがメディア表象の中でどのように利用されているかを考察する。次に第3章では、サッカーと人種差別についての問題を研究している陣野俊史の著書『サッカーと人種差別』を出発点に、陣野のいう「人種差別の歴史を知るべき」や「コスモポリタンになるべき」、「アイデンティティをもたない」といった議論を考察する。第4章では、ニューカレドニア出身の元サッカーフランス代表であるクリスティアン・カランプーの事例を取り上げ、彼のもつニューカレドニアの民族のカナクとしてのアイデンティティや、そこから見える植民地の記憶を考察する。また、1998年ワールドカップ優勝を果たしたフランスにおいて期待された人種を超えた「民族融合」の団結と連帯、そしてその後、フランス社会に差別が根強く残ったことの

困難や落胆を、当時フランス代表として活躍していたマルセル・ドゥサイーや先ほど紹介したカランブーらの言葉から分析する。終章では、それまでの議論を踏まえた上で、メディア化されたサッカーにおける人種差別や排外主義についての構造や現状を検討し、そこからサッカーを通してどのように差別と闘うかについて言及する。

第2章 メディアとサッカー

世界的に人気の高いスポーツであるサッカーは、メディアと密接につながっており、サッカーの情報はテレビや SNS などのマスメディアによって日常のあらゆるところに拡散されている。FIFA ワールドカップ (FIFA World Cup) といったメガスポーツイベントになると約 6680 億円ともいわれる莫大な経済効果も生み⁴、注目度も高くなるからでもある。しかしそれに伴って、スタジアムで起きる差別行為などの悪意ある行動や人種差別も、サッカーの情報の一部として、メディアや SNS によって伝播し広まっていく。サッカーというキーワードは多くの人の注目を集めるため、ゲームの面白さだけでなく、人種差別問題も、非常に拡散しやすい構造になっている。よって、サッカーにおける人種差別について考えるために、まず、メディアとサッカーの関連について検討したい。この章では、メディアによってサッカーに関する言葉や映像が利用され、拡散していることを踏まえて、サッカーとメディアの関係について、この二つがどういった形で結びついており、メディアにおいてサッカーがどのように利用されているかを、哲学者ウンベルト・エーコの言葉や、哲学者スラヴォイ・ジジェクの造った概念である「相互受動性」や、ホンジュラスとエルサルバドルの戦争である「サッカー戦争」などを分析しながら考察していく。

⁴朝日新聞「(W杯という挑戦 開催国・南アを行く：下) 市民 停滞脱出のきっかけに」2009年07月02日、朝刊、スポーツ3、17頁、朝日新聞デジタル、<https://xsearch.asahi.com/kiji/detail/?1736405857498> (2025年1月9日閲覧)

2.1. サッカーと「相互受動性」

あらゆる情報が拡散されているサッカーをとりまくメディア環境の状況を、哲学者のウンベルト・エーコは「記号論的なゲリラ戦のひとつのかたちである」と述べ、サッカーが高度にメディア化されていることを表現した（トリフォナス, 2004, p.33）⁵。この言葉は、サッカーに関わる様々な言葉や映像が、メディアによる表象を利用して、メディアから情報を得る人々に、サッカーに関わる事柄の価値の有無大小を教え、感情を喚起することを示している。倫理学・記号学研究者のピーター・P.トリフォナスはこのことについて、「メディアの装置が、言葉と映像の両サイドから、サッカーの記号の受け止め方をどんどん枠にはめていく」（同書, p.34）と述べている。これは、メディアによる言葉や映像の記号は、驚き、緊張、幻滅、歓喜といった典型的な反応を生み出したり、感情的な反応を引き出すように計算されながら構築されており、それによって、サッカーの試合が行われている現場にいるいないにかかわらず、メディアの影響を受けずに試合と関わることは不可能になっていることを示している（同書, pp.34-35）。

このようにサッカーがメディア化されていることを踏まえた上で、メディア論研究者の毛利嘉孝が、哲学者のスラヴォイ・ジジェクが造った相互受動性(*interpassivity*)という概念を通して、サッカーをとりまくメディアのあり様についての議論をさらに推し進めている。このジジェクが造った概念である相互受動性とは、双方向性（相互能動性, *interactivity*）と対をなすものである。

毛利が述べるサッカーにおける相互受動性の例をあげる前に、まずは相互受動性についてのジジェクの言葉を引用する。

そうした双方向性の裏返しは相互受動性である。（たんに受動的にショーを観てい

⁵ ピーター・P.トリフォナス著, 富山太佳夫訳 (2004) 『エーコとサッカー』 岩波書店

る代わりに) 能動的に対象に働きかけるという状況を裏返せば、次のような状況が生まれる。すなわち、対象そのものが私から私自身の受動性を奪い取り、その結果、対象そのものが私の代わりにショーを楽しみ、楽しむという義務を肩代わりしてくれる。強迫的に映画を録画しまくるビデオ・マニア(私もそのひとりだ)ならほとんど誰もが知っているはずだービデオデッキを買くと、テレビしかなかった古き良き時代よりも観る映画の本数が減るということ。(中略) 実際には映画を観なくとも、大好きな映画が自分のビデオ・ライブラリに入っていると考えるだけで、深い満足感が得られ、時には深くリラックスし、無為(far niente)という極上の時を過ごすことができる。まるでビデオデッキが私のために、私の代わりに映画を観てくれているかのようだ。

(スラヴォイ・ジジェク著, 鈴木晶訳, 2008, pp.50-51) ⁶

双方向性とは、受信者が対象を眺めるだけの一方向的な発信、受信にとどまらず、両者の積極的な参加によって成立する関係性を指すが、ジジェクによると、相互受動性とは、対象そのものが自分から自分自身の受動性を奪い取り、その結果、対象そのものが自分の代わりにショーを楽しみ、楽しむという義務を肩代わりしてくれると述べている。その例として、ビデオ・ライブラリを挙げて、説明しようとしている。この場合でいうと、映画好きの人がビデオデッキを持っている時に、ビデオデッキが自分のライブラリにあることに満足し、満足感が得られ、観る映画の本数は減るという。ビデオデッキ(対象)が自分の受動性を奪い取り、自分のために、自分の代わりに映画を観てくれているという状況になる。

では、この相互受動性とサッカーの関係はどのようなものなのだろうか。毛利嘉孝はこの相互受動性の一例について、FIFA ワールドカップにおけるスポーツ中継をあげている。

⁶ スラヴォイ・ジジェク著, 鈴木晶訳(2008)『ラカンこう読み』, 紀伊國屋書店

たとえば、2014年にブラジルで開催されたFIFAワールドカップにおいて、日本代表チームが試合をした翌日のワイドショーは、試合そのものではなくいかに日本全国津々浦々試合に一喜一憂したのかというニュースで埋め尽くされた。試合を見るその様子を見ることでサッカーを楽しみ、試合を見ている人と自己同一化することを通じて人々は経験と感動を共有したのである。ここでは、自分以外の誰かが試合を見ていることが感動の基盤になっている。

ソーシャルメディアは、このようなテレビ番組の視聴の際の相互受動性を可視化した。ツイッターの「リツイート」や短い「呟き」、フェイスブックの「シェア」、「いいね」という簡単に参加できる機能は、相互受動性をリアルタイムで可視化し、経験することを可能にしたのである。

(毛利, 2015, pp.344-345) ⁷

サッカーの試合を見ている主体である自分の感動ではなく、毛利が言うような、自分以外の誰かが、試合を見ている様子が感動の基盤になるという状況は、サッカーの情報がメディアの映像によってかなり拡散されていないと不可能なことである。

トリフォナスが言うように、メディアの影響を受けずにサッカーの試合と関わることは不可能になっている中で、サッカーはメディアを利用して人々の感情を喚起し、驚き、緊張、幻滅、歓喜といった典型的な感情の枠にはめ込もうとしている。さらに、毛利が述べたように、ソーシャルメディアが、「いいね」や「リツイート (リポスト)」、「シェア」、短い「呟き」といった簡単に扱える機能により、自分以外の誰かが試合を楽しんでくれているという相互受動性を経験することを可能にしたことによって、その楽しんでいる人に自己同一化し、自分以外の誰かがサッカーを見て楽しんでいることが感動の基盤になる事態が生じて

⁷ 毛利嘉孝 (2015) 第13章「ポストメディア時代における文化政治学へ向けて」、石田英敬, 吉見俊哉, マイク・フェザーストン編著『デジタル・スタディーズ3 メディア都市』2015年, 東京大学出版会

いる。これは自分から受動性を奪い、もはや試合を見ていなくてもメディアの中でサッカーを楽しめるという状況である。エーコがサッカーを「記号論的なゲリラ戦のひとつのかたちである」と述べていたが、エーコが想像した以上に、現代ではメディアを通してサッカーに関する言葉や映像によって、人々の感情が喚起され、その盛り上がりで自分自身が感化されていく状況であるのではないだろうか。こういったことから、マスメディアの影響やソーシャルメディアの発達によって、サッカーを実際に見ることではないところで、誰かの感動や経験が自分自身に与える影響というのは計り知れない。

エーコやトリフォナスの言葉から、メディアの影響を受けずにサッカーの試合と関わることは不可能ではないかということが示されたが、それをさらに推し進める形で、毛利は、ソーシャルメディアの発達により、そのメディアを前提として誰かの感動を共有することによってサッカーを楽しむという現状も生まれていることを論じているのである。

2.2. サッカーは関心を引き、本質を隠す―「サッカー戦争」の事例

このようにメディアによってサッカーの情報は世界中に発信されることにより、自ずと注目も集まることになる。ただ、「サッカー」という言葉に注目が集まるにつれ、物事の本質を覆い隠してしまうという事態も発生してしまう。このことを表す事例として「サッカー戦争」が挙げられる。

「サッカー戦争」とは、1970年に、中南米の国であるホンジュラスとエルサルバドルがワールドカップの出場権を争って試合をしており、その試合が火種となって始まったといわれる戦争である。これを「サッカー戦争」と名付けたのが、ジャーナリストのリシャルト・カプシチンスキだが、彼は現地でその戦争取材していた。カプシチンスキは、この戦争が起きた本当の理由について、サッカーが原因ではなく、移民の問題から二国間の緊張が生まれたと述べている。

ただ、彼は戦争が起きた理由がサッカー以外のところにあることを知りつつも、この戦争を「サッカー戦争」と名付けた。それは「サッカー」という言葉を使うことで多くの関心を引こうとしたからではないだろうか。彼はこの二国間の国際的関心について以下のように述べている。

何日かのあいだ、ホンジュラスとエルサルバドルは世界の新聞の第一面を占め、興味を引き、関心の的となった。第三世界の小国が活発な国際的関心を呼ぶ唯一のチャンスは、彼らが血を流すと決めたときだ。これは悲しい真実だ。だがそれが現実なのだ。

(カプシチンスキ, 1993, p.199) ⁸

ここではカプシチンスキ本人が「サッカー戦争」という言葉を用いた理由を明確に説明している訳ではないが、以上のように、彼は中南米にある第三世界の小国のホンジュラスとエルサルバドルに注目が集まらないことを嘆いており、彼自身が「ホンジュラス・エルサルバドル戦争」と呼ぶよりも、「サッカー戦争」という言葉を用いたほうが関心を引くと考えて名付けた可能性は高いのではないか。

ただ、「サッカー戦争」という言葉が関心を引いたとしても、その言葉を用いることが適切であったかどうかについては批判的な意見もある。伊藤めぐみは「サッカー戦争」という言葉について以下のように述べる。

マスメディアは、1969年に起きたこの戦争をサッカーワールドカップ予選試合の勝敗が原因であるとし、この名を付したが「サッカー戦争」と言う用語を用いた瞬間、より本源的な問題を覆い隠す言語暴力に加担することになりはしないか。

⁸ リシャルト・カプシチンスキ (1993) 『サッカー戦争』中央公論社

(伊藤, 2007, p.1)⁹

伊藤は2006年に1か月ホンジュラスに滞在し、聞き取り調査を行い、「サッカー戦争」という名前が感じさせるイメージとは程遠い、戦争の記憶にめぐりあったと述べている。

伊藤によると、大半のホンジュラス人は現在、サッカーが原因だと言われているのは、エルサルバドルが戦争を起こすための「口実」として利用したからだと言っている。また伊藤は、エルサルバドルだけでなくホンジュラス報道も、戦争の原因をサッカーだと問題を単純化するように「サッカー戦争」と伝えたが、その理由は当時のホンジュラス政権は国民が政治に関心を持つことを望まなかったためだと、現地住民の言葉から考えることができるとしている(伊藤, 前掲論文, p.6)¹⁰。

しかし伊藤は、2022年の毎日新聞のインタビューでは、もし今同じことが起きたなら、「『サッカー戦争』と表現するかもしれないとも感じる」と言う。これに対して記者の田原は、「玉石混交のウェブ上で、ひと目を引く見出しやインパクトのある表現は欠かせない。それは既存メディアも同じだ」としている¹¹。

また、田原は、カプチンスキの「第三世界の小国が活発な国際的関心を呼ぶ唯一のチャンスは、彼らが血を流すと決めたときだ。これは悲しい真実だ」という文章を引用し、世界の目を向けさせるための苦悩の表現だったのかもしれないと述べている¹²。

「サッカー」というスポーツ自体が国際的に認知され注目されていることから、戦争という悲惨な状況を国際社会に訴えるためにも使われる。「サッカー」という言葉がもつ、人の注意を引きつけ、喚起する力は、マスメディアやソーシャルメディアと結びつくことで、大

⁹ 伊藤めぐみ(2007)「いわゆる『サッカー戦争』(1969年)をめぐって - ホンジュラス・記憶の政治学の試み -」『貿易風』2, 2007-04 中部大学国際関係学部, pp. 261-285

¹¹ 毎日新聞「フィールドの向こうに：サッカー戦争＝田原和宏」2022年7月14日 東京夕刊, 2頁, 総合面, 毎索, <https://dbs.g-search.or.jp/aps/WSKR/main.jsp?ssid=20250109160258694gsh-ap03> (2025年1月9日参照)

¹² 毎日新聞、前掲記事

きな力を持ち、この場合でいうとスポーツと戦争という一見かけ離れたところにも結びついていく。メディアによって「サッカー」という言葉が使われた場合、本来は複雑な事象であるはずの戦争が、ただ一つのゲームをきっかけにしているかのような、単純化された図式に還元されてしまうことがある。しかしそれにもかかわらず、「サッカー」がメディアと深く結びついているがゆえに、「サッカー」という言葉を使うことによって、国際社会の関心を引くという効果をサッカーが内在的に持っていることが歴然としている場合、その効果が優先されることがある。

2.3. サッカーが果たした役割

ただ、サッカーの試合がサッカー戦争の理由ではないにしても、サッカーが果たした役割もあると考えられる。この試合はホーム&アウェイで行われたのだが、1回戦目の後、負けた側のエルサルバドルの18歳の女性が自分の心臓をピストルで撃ちぬくという事件が発生し、その葬儀は新聞でも報道され、テレビ中継され、首都全体がそれに参加した。2回戦目はエルサルバドルで行われ、そこでホンジュラスのファンは足蹴にされ、殴られ、国境へと避難した。その中で二名が死亡し、多数が病院に担ぎ込まれ、彼らの車150台が焼かれた。そして、数時間後、二国間の国境は閉鎖された。こういったことが起きてしまったことから、サッカーの試合が、高揚感による一種のハイな状態を引き起こし、戦争状態になる呼び水として機能した可能性は高い。

サッカーの試合となると、日常的な冷静な判断ではしないようなことをしてしまい、緊張状態を生み、状況が悪いと、緊張していた導線に次々に発火して、戦争にすら至る。伊藤はサッカーが果たした役割については以下のように述べる。

政治がサッカーを利用し、また人々の側も試合の結果に即座に反応したことは考慮

すべきだ。今もサッカーの試合が原因として記憶され、語られてもいる。虚構の部分がいくらかあるものも、語れることでまるで事実であるかのような働きをし、別の何かに働きかけ新たな何かを生む。

(伊藤, 2007, p.7)

ただのスポーツであるサッカーと戦争はそもそもは関係がない部分であったとしても、国の代表であるナショナルチーム同士が試合をするということにより、二国間の争いがスタジアムに持ち込まれることで、人々が試合の結果に感化され、緊張状態を生み、伊藤が言うように政治がサッカーを利用し、虚構の部分でさえ事実であるかのような働きをしてくのだろう。

メディアにおいてサッカーは利用されることが多く、サッカーという言葉の持つ人の注意を喚起する力を使って、注目されない第三世界の窮状を世に知らせることもあれば、また政治がサッカーを利用し、恐慌の部分を事実のようにしてしまうこともある。サッカーは世界的に注目度が高く人気のスポーツであり、サッカーに関する情報は拡散力が強いからこそ、このような事態も起こりえるのである。

このようなメディアの力を踏まえて、サッカーにおける人種差別問題について何が言えるだろうか。それを次章で検討したい。

第3章 サッカーにおける人種差別問題への解決策（陣野俊史著『サッカーと人種差別』を中心に）

この章では、陣野俊史の『サッカーと人種差別』という本において紹介されているサッカーにおける人種差別問題のいくつかの事例とその解決策に焦点を当て、それを分析していきたい。

3.1. 陣野による議論

陣野俊史は、『サッカーと人種差別』という著書において、日本で体系的に紹介されてこなかったヨーロッパのサッカーにおける人種差別について整理して論じている（陣野，2014）¹³。

陣野はフランスにおけるサッカー事情に造詣が深く、『フットボール都市論 スタジアムの文化闘争』（2002）や『ジダン研究』（2023）といった本の中で、選手の個人史から都市とサッカーの関係まで幅広く書いている。そこでサッカーにおける差別問題を扱った彼の本を出発点に、サッカーにおける暴力的な差別問題について検討し、その本の中で紹介されている解決策を検討していく。

2014年4月27日のスペインの1部リーグのFCバルセロナ対ビジャレアルCFの試合中、コーナーキックの場面で、FCバルセロナのダニエウ・アウベスが観客席から投げ込まれたバナナを食べるというシーンの動画が世界中にSNSやマスメディアによって拡散された。ハッシュタグ#WeAreMonkeys（私たちは猿だ）によって世界中の有名なサッカー選手がバナナを食べるシーンを撮影し、ソーシャルメディアを介して発信するといったムーブメントが起きた。

欧州では歴史的にバナナが差別の象徴と化しており、バナナを投げつけること自体が「お前は猿だ」という差別的表現になる。ダニエウ・アウベスはこの行為に対して、「バナナを食べる」というユーモアで、人種差別と人種差別者を馬鹿にし、「笑い」に還元することで、「バナナ=猿のエサ=差別的道具」というつながり自体を無効化する表現をした。その行動が多くの人々の共感を呼び、ダニエウ・アウベスのアクションをきっかけに、バナナによる差別を「馬鹿馬鹿しいものだ」とし、無効化してしまおうという人たちによって、自分たちも猿だ

¹³ 陣野俊史（2014）『サッカーと人種差別』文春新書

という意を表明するハッシュタグがつけられ、SNS で拡散されるというムーブメントにつながったのである。

しかしそれに元フランス代表ルイ・サハは警鐘を鳴らしている。「何も面白いようなことじゃないし、まるで誰もがこう言っているようだ『何も変えることはできないから、笑い飛ばしてしまおうと』と」(陣野, 2014, p.75)。

陣野はサハによる批判的観点に同意しており、サハの危惧が現実化して、人種差別の根絶などできるはずもないから、笑ってさえいればいいという輪が世界中に拡散した結果、何ら解決を見ることもなく、有名になったバナナだけが投げ込まれ続けていると述べている。また、バナナが記号として独り歩きしており、幻想の黒人に向って、お前は猿なのだ、という人種差別を表象するアイテムとして、バナナはいまも機能しているとしている。(同書, pp.76-77)

こういったサッカーにおける人種差別の事例を踏まえた上で陣野は、人種差別に対抗するすべとして、「人種差別の歴史的経緯を把握すること」と「コスモポリタンの在り方をレッスンすること」の二つをあげている。この二つについて次の項で詳しく述べたい。

3.2. 「人種差別の歴史を知るべき」

ここでは陣野が人種差別に対抗するすべとして述べた二つのうちの一目「人種差別の歴史的経緯を把握すること」について検討する。陣野は『サッカーと人種差別』において差別問題を扱う中で、多くの例を紹介している。そうした例を取り扱うことについて以下のよ

うに述べる。

私はこれらの問題を即座に「解決」したいのではない。ただ、ひとつ言えることがあるとすれば、サッカーの中の差別(主として人種に関わるそれ)を通史的に整

理することで見えてくるものがある、ということだ。

(陣野, 2014, p.24)

この「見えてくるもの」について具体的な明言はされていないが、サッカーにおける人種差別を通史的に見ることは、差別問題に取り組むうえで必要だという主張である。例えば、陣野はさきほどのダニエウ・アウベスのバナナを食べたことと絡めて、バナナが黒人差別の表象として機能している状況を変えるために、バナナがそのような表象を持つようになった経緯を明らかにする努力をしなければならないと以下のように述べている。

ティエリ・アンリが述べるように、プレーヤーは無力だ。フィールドの中ではプレーするしか選択肢はない。だからこそ、観客である私たちは、彼らの無力を汲み取り、バナナが差別の表象として固着してきたプロセスを明らかにし(第1章に挙げた具体的な事件簿でもすでに十分に明らかなのだが……)、その偏見を粉砕するべく努力しなくてはならないのだ。

(陣野, 2014, p.191)

以上のように、陣野はサッカーにおける人種差別問題に取り組むうえで、歴史的経緯を把握することと、差別に使われるアイテムが差別の表象として固着してきたプロセスを明らかにすることが、必要だという考えを示している。

では、バナナが差別の表象として固着してきたプロセスとはどのようなものなのだろうか。黒人選手にバナナが投げつけられるのはなぜだろうか。その背景には、黒人とサルを結びつける長年の考えがある。これは、「社会ダーウィニズム **Social Darwinism**」にその起源をたどることができる。E・R・ドッズによれば、「社会ダーウィニズム」は、ダーウィンの進化論における淘汰の概念を誤って適用した人々によって作られた。ダーウィン自身は人間

の進化についての記述において、自然淘汰の重要性をむやみやたらに述べていたわけではなく、形成期においては人間は自然淘汰の作用の下で、その知的ならびに道徳的な能力を獲得したのだけれども、その能力がさらに発展するにあたっては、訓練、教育、伝統によるところが遥かに大きいと述べていた。しかし、ダーウィンの後継者たちはそのような留保を付けなかった。たとえばカール・ピアソンは「淘汰とは、ある人種がたえず進歩するために社会がとりうる唯一の有効な過程である」と断定した。そのような社会ダーウィニズムを支える観念から、自然淘汰を合理的な淘汰に代えようとする目的をもって、様々な種類の優生学運動が生まれた。また、その説くところは政治的には大変曖昧なものになり、ある人々は競争による闘争こそ進化の秘訣だとして、自由放任な個人主義の正当化にそれを用いた。別の人々にとっては、それは社会主義の科学的な基礎となるものであった（E・R・ドッズ著、見市雅俊訳、1990、pp.621-622）¹⁴。長年の論争を経た今日では、「社会ダーウィニズム」は自然淘汰の考え方を無分別に用いたことで批判の対象となっているが、この優性思想的な人種主義の発想を持つ考え方が、現在のバナナを黒人選手に投げつけるような人種差別問題に影響を与えてきたとみることができる。

このようなバナナが差別の表象として固着してきたプロセスを辿るように、人種差別の歴史的経緯を把握することは、たしかに進化論における淘汰の概念といったもっともらしいとされている考え方がどこまで正しいかを再考することにつながり、出来事の背景にある人間の認知のあり方に対して一定の理解を深めることに役に立つため、人種差別をなくしていくうえで効果はあるだろう。なぜその人種差別が黙認されているのか、自分も差別に加担していないだろうかと自覚的になるからである。

しかし、このように差別の背景にある歴史的経緯を知ることは、黒人は白人よりサルに近いといった偏見をなくすために絶大な効果があるともいえないだろう。そもそもわざわざ

¹⁴ エリック・ロバートソン・ドッズ著、見市雅俊訳（1990）「進歩の観念（古典古代における）Progress in Classical Antiquity」フィリップ・P.ウィーナー編、荒川幾男ほか日本語版編集『西洋思想大事典 Dictionary of the History of Ideas 2』平凡社

表立って過激な人種差別行為を行う人々はその行為に自覚的になろうとするとは考えにくく、むしろそこまで人種差別に関心がなかったけれど、スタジアムで起きるような人種差別行為に違和感を持ち、この行為が起きる背景が知りたい、といった人でなければ、わざわざ特定の歴史的経緯を把握しようとししないのではないか。また、人種差別の歴史的経緯を把握することはこの問題を考えていくうえでのきっかけを提示するにすぎないのではないだろうか。

3.3. 「コスモポリタンになるべき」

次に、陣野が人種差別に対抗するすべとして述べた二つ目の「コスモポリタンの在り方をレッスンすること」について述べる。

陣野は「コスモポリタン」を人種差別に対抗するための在り方として提唱している。では、陣野が考える「コスモポリタン」とはどういったものだろうか。

陣野は、差別をなくす上で、バナナと黒人のつながりを断ち切る必要があるとして、「黒人」が幻想の産物であるかを発想として共有することの必要性を以下のように述べている。

選手に向ってバナナを投げる人間を嫌ったり憎んだりしているだけでは、問題は一向に解決しない。彼らがバナナを投げている「黒人」がいかに幻想の産物であるか、を発想として共有する必要がある。

(陣野, 2014, p.207)

以上のように述べた上で、陣野氏は、イビチャ・オシム氏がボスニア・ヘルツェゴビナサッカー協会の民族紛争問題（協会の代表者が民族争いで1人に絞れず3人いたため FIFA から加盟資格停止処分を受け、国際試合に出場できなくなった状況）を諫め、仲裁した例を挙

げている。オシム氏は各民族の代表者に会いに行き、「政治からスポーツを切り離して[会長一本化を]実現したい」と願い出で、その結果、会長一本化を図った投票は満場一致で可決し、ボスニア・ヘルツェゴビナ代表のワールドカップ出場を手にした。この模様は2014年5月にNHK・BS『オシム 73歳の闘い』という番組で放送されていたのだが、陣野氏は、オシム氏のどこの民族にも与せず解決に向けた行動した番組内での様子を以下のように述べる。

ひとことで言えば、コスモポリタンになるための練習である。

憎みあっている人々がいる。信頼という言葉とはほど遠い状態で暮らしている民族がいる。その人々の内側にあって、彼らと共存していくのはどうすればいいのか。オシムはそのための技芸を番組の中で見せてくれている。

(陣野, 2014, pp.205-206)

このように陣野はオシムをコスモポリタンのお手本として提示している。

一般的にコスモポリタンとはコスモポリタニズム (cosmopolitanism) の賛同者のことをいい、コスモポリタニズムとは語源的にはギリシア語の *κόσμος* (世界) と *πολίτης* (市民) との合成語で、世界市民主義、四海同胞主義、万民主義などと訳す。人類全体を一つの世界の市民とみなす立場をいう。(馬場, 1994, p.302)¹⁵

またコスモポリタニズムは、狭い国家主義やナショナリズムを超える点で国際主義(インターナショナリズム)と共通するが、後者とは異なり、前者は国家や民族を無視し媒介しない点で区別される(加藤, 1994, p.321)¹⁶。

後でも述べるが、陣野はコスモポリタンの反対の立場として、自分が属する共同体に過剰

¹⁵ 馬場伸也 (1994) 「コスモポリタニズム」 見田宗介ほか編 『[縮小版]社会学事典』 弘文堂

¹⁶ 加藤哲郎 (1994) 「コスモポリタニズム」 秋庭隆編 『日本大百科全書 9』 (第2版) 小学館

なまでの同一性を求め、過度にアイデンティティを信奉する者を挙げている。この考えに近い立場として「コミュニタリアニズム (共同体主義)」がある。コミュニタリアニズムとは、人間は共同体の中で他者からの影響を受けつつ人格形成を行うとともに共通善 (道徳) の何たるかを学ぶ存在であることを強調する立場である。コミュニタリアニズムの問題としては、コミュニタリアニズムの発想を自明のものとしてしまうと、共同体外の世界に対して閉鎖的になる可能性を払拭できないことが指摘されている。(今田, 2010, p.232-233)¹⁷

陣野の述べるコスモポリタンの話に戻るが、陣野はリチャード・ライトの『アウトサイダー』という小説がコスモポリタンのレッスンに抜群の素材だとしたうえで (陣野, 2014, p.212)、この小説のアウトサイダーとコスモポリタンの類似点を以下のように述べている。

どの人種にも民族にも属さない「アウトサイダー」は、オシムのいう「コスモポリタン」に似ていないだろうか？ 他人から押しつけられたアイデンティティを拒むことはもちろん、自分でもアイデンティティを課さないことなど、共通点は多い。(陣野, 2014, p.216)

これに対し、陣野は自分が属する共同体に過剰なまでの同一性を求め、「過度にアイデンティティを信奉する人々」を、自分の属する人種や民族や国籍の同一性を信じ込み、他人が見えなくなっており、愚かであり、コスモポリタンの対蹠地にあるとして以下のように批判している。

コスモポリタンの反対の立場は、過度にアイデンティティを信奉する者だろう。民族であれ、人種であれ、自分が属する共同体に過剰なまでの同一性を求める者たち、

¹⁷ 今田高俊 (2010) 「コミュニタリアニズム-エツィオーニ他」 日本社会学会, 社会学事典刊行委員会編『社会学事典』丸善

彼らは、自分の信奉する同一性が揺らぐことが不安で、だからこそ共同体内の価値の混乱を許さない。アイデンティティという言葉を一蹴するつもりはないが、アイデンティティを持つことができない人々のことを想像することも、コスモポリタンたらしとする練習の一環かもしれない。

(陣野, 2014, p.209)

同様に、陣野は「自分の属する人種や民族や国籍の同一性を信じ込み、他人が見えなくなったとき、人は醜くなる。」(同書, p.210-211)と述べたり、「自分の属する共同体に執着することの愚かさは、コスモポリタンの対蹠地にある。」(同書, p.211)として、このような人々を批判的に捉えている。

以上から、陣野が考える「コスモポリタン」の在り方は、オシムをお手本としながら、他人から押しつけられたアイデンティティを拒み、自分自身にもアイデンティティを課さないことであり、アイデンティティを持つことに対しては、否定的な立場をとっている。また、「コスモポリタン」の反対の立場を、共同体に過剰なまでの同一性を求め、共同体に執着することだとしていることも特徴の一つとして挙げられる。

3.4. 「アイデンティティを持たない」ことは解決策なのか

以上のように陣野の考える「コスモポリタン」を見てきたが、陣野は、「アイデンティティを持たない」、逆に「過度にアイデンティティを信奉する者」といった対極的な立場を示しながら議論を進めようとしている。たしかに二つの立場を対極の位置に置くことで議論自体は見やすくなるが、アイデンティティとはそのような対極的議論で解釈されてよいのだろうか。

まず、アイデンティティという用語を整理したい。この概念は社会心理学用語として、

1950年代にアメリカの精神分析学者E・H・エリクソンが用いて以来、広く人間諸科学のキーワードとして定着した。エリクソンによれば、アイデンティティとは「自己確立」ないしは「自分固有の生き方や価値観の獲得」にほかならないという。また、ここでいう「自己」とは内省によってみいだされる主観的自己であるよりは、社会集団なのかで自覚され、評価される社会的自己のことである。個人は共同体の固有の価値観に自己を同一化し、そのなかでさまざまな社会的役割を積極的に引き受けることによって自己を確立する。これら複数の役割的自己を統合する根源的な自己のことを、エリクソンは「人格同一性」あるいは「自我同一性」とよぶ。(野家, 1994, p.47)¹⁸エリクソンのいうように、「自己」とは社会集団のなかで自覚され、評価される社会的自己のことであるとすると、アイデンティティ(自己確立)はそういった社会集団や共同体の中で育まれていく。いずれかの社会集団や共同体に人々は属しながら生活していることを考えると、そこから外れた「アイデンティティを持たない」生き方というのは現実離れしているといえる。ほとんどの人が「アイデンティティを持たない」という立場には当てはまらず、陣野の議論は現実と乖離する部分があるのではないだろうか。

ただ、個人のアイデンティティではなく、集団のアイデンティティ、特にナショナル・アイデンティティという概念について考える場合、先程の3章2項のアウトサイダーとコスモポリタンの類似点の話で述べていた陣野のいうコスモポリタンのあり方のひとつの「他人からおしつけられるアイデンティティを拒むこと」(陣野, 前掲書, p.216)には同意できる部分もある。

ナショナル・アイデンティティというのは、国民意識、国民的一体意識、国民的同一性と訳される言葉であり、一定の領土や共通の価値信条体系、社会文化様式などのような、一つの共同体単位としての国家の特性、あるいはこれに帰属しようとする構成員としての国民

¹⁸ 野家啓一(1994)「アイデンティティ identity」渡邊静夫『日本大百科全書 1』(第2版), 小学館

の一体感をいう¹⁹。こうした国家という共同体を前提としたサッカーのナショナルチームは、スタジアムでは、この一体感や連帯意識がチームを応援する原動力になる。ただ、国家という枠組みのナショナル・アイデンティティを押し付けられる状態になる場合、それを拒むような状態に陥る場合もある。そのアイデンティティというのは、誰もが実体として感じられるものではないともいえるからである。千田有紀はナショナル・アイデンティティについて以下のように述べる。

ここでよく注意しなくてはならないことは、ナショナル・アイデンティティの基盤にあると考えられる「共通性」は、ある種のフィクションであるということである。ルナンが『国民とは何か』において述べた有名なフレーズに、「国民の本質とは、すべての個々の国民が多くのことを共有しており、そしてまた、多くのことをお互いすっかり忘れてしまっているということにある」というものがある。ホブズボームが、『伝統の創造』において明らかにしたように、私たちが「伝統」と考えてきたものの大部分が、近代に入ってからつくられた「発明品」である。それと同時に、不都合な過去を忘却することもまた、共同の記憶をつくり出す作業の別名である。

(千田, 2010, p.447)²⁰

このように、ナショナル・アイデンティティの基盤にあると考えられる「共通性」は、ある種のフィクションであるともいえ、それを拒むような感情が生まれるのはある意味当然のことといえる。また、先ほどの文でも引用されていたルナンは、「近代的な国民は、したがって、同一方向に収斂した一連の出来事によってもたらされた歴史の産物なのです」とも述

¹⁹ フランク・B・ギブニー編著 (1993) 『ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典 4』 (第2版改訂), ティビーエス・ブリタニカ, p.926

²⁰ 千田有紀 (2010) 「ネーション・ビルディングとナショナル・アイデンティティ」 日本社会学会, 社会学事典刊行委員会編 『社会学事典』 丸善

べ、フランス市民は誰一人、自分がどの民族の末裔か知らず、しかもこれらの証拠と称するものも、系図学者のどんな方式をもってしても整序不可能な数えきれない未知の交雑のため、本質的に不完全だとしており（E・ルナン[鵜飼訳]，1997，p.48）²¹、このルナンの言葉からも、その「発明品」であるナショナル・アイデンティティは歴史的に作り出され、その基盤の「共通性」も、証拠や根拠が曖昧で不確かなものであることが分かる。

特にサッカーはワールドカップでも顕著のように、国同士の試合が非常に盛り上がり、コソボ、香港、イングランド、スコットランド、ウェールズなど例外はいくつかあるものの、基本的には国ごとに代表チームが作られる。プレイヤーも観戦者の側も自分の国というのを意識しながら、サッカーの試合と接する。そのため、ナショナル・アイデンティティの問題とも関わってくる。

陣野のいう「コスモポリタン」というあり方から派生する「アイデンティティを持たない」といった議論は、極端すぎる部分もあったが、「他人から押し付けられたアイデンティティを拒む」という事に関して言えば、ナショナル・アイデンティティのようなフィクションともとらえられるアイデンティティに馴染むことができないという場合も十分に考えることができるため、同意できる部分もあるだろう。

しかしながら、たしかにコスモポリタンという在り方における「他人から押し付けられたアイデンティティを拒む」という方法は、どの人種に属するといったカテゴライズをなくしていく考え方ではあり、サッカーにおける人種差別をなくしていくうえで解決策の一つであると思うが、いずれかの社会集団や共同体に人々は属しながら生活しており、共同体主義というのはサッカーの特徴の一つでもあるうえ、サッカー選手ひとりひとりも国家、クラブの代表選手として出ているが、その事情は複雑である。

次の章では植民地の記憶に焦点を当ててその複雑性について考えたい。

²¹ エルネスト・ルナン，鵜飼哲訳（1997）「国民とは何か」、E.ルナン[ほか]著，鵜飼哲[ほか]訳『国民とは何か』インスクリブ

第4章 カランブーの事例

第3章での「アイデンティティを持たない」ことは解決策なのかという議論における、集団アイデンティティに関わる事例は、国家が主体となる行為や政策によっても大きな影響を受ける。そういった国家の政策の例として帝国主義時代の植民地政策があげられる。フランスはかつてアフリカ、アメリカ大陸、アジア、オセアニアの国々を植民地化し、フランス代表にもかつてフランスの植民地だった国を出自にもつサッカー選手が少なからずいる。その中の一人としてクリスティアン・カランブーを取りあげたい。次の項では、植民地の記憶がカランブーのアイデンティティにどのような影響を与えたかを、カランブーの言葉を中心に見ていく。

4.1. クリスティアン・カランブー

サッカー選手が植民地の記憶を引き継いでいる例としてクリスティアン・カランブーがいる。彼はニューカレドニア出身で、フランスに移住し、フランスやイタリア、スペインなどのクラブを転々とした。フランス代表としてもプレーし、1998年のフランスのワールドカップ優勝にも貢献した選手である。また、彼は「ラ・マルセイエーズ」を歌うことを拒否し、非難を浴びた選手でもある。しかし、それには彼が生まれ育った場所のニューカレドニアのカナクと呼ばれる民族の植民地の記憶が影響している。

まず、カランブーのことについて書く前に、ニューカレドニアにおけるカナクのアイデンティティをめぐる闘争の歴史について整理しておきたい。

ニューカレドニアは、オーストラリア大陸の北東に位置する南太平洋のメラネシア地域に含まれる列島であり、フランス本土からは約 17,000km 離れた場所にある。1774年に、イ

ギリスの海軍士官で探検家のジェームズ・クックに発見され、フランスの植民地化は、海軍准将デポワントが 1853 年に行った領有宣言からはじまる。植民地化に伴う先住民の強制移住、課税、徴用といった急速な社会変動により、1878 年に先住民の蜂起を引き起こしたが、鎮圧された。また、先住民の周辺化と植民の進展につれ、1887 年には、アルジェリア、インドシナに引き続きニューカレドニアにも現地住民法 (Le Code de l'indigénat) が導入された。メラネシア人はニューカレドニアの現地住民の中でも非ヨーロッパ系現地住民として普通法 (Droit commun)、すなわち、フランス本国法が適用されない範疇に分類された。現地住民法にしたがい、先住民のみに適用される処罰規定の存在は、ヨーロッパ系住民によるメラネシア人の私的使用を促し、植民地社会に事実上の身分制度の成立をもたらすこととなった。(尾立, 2024, pp.5-6) ²²

フランス領のニューカレドニアでは元来オーストロネシア語系の言語を話す人々が生活していた。約 30 の言語集団からなる先住諸民族の人々は今日カナク (Kanak) と称されている。カナクの人々は 1853 年の併合以降、フランスによる植民地支配を受けてきたが、1970 年代半ばから独立運動を本格化させ、1984 年に結成されたカナク社会主義民族解放戦線を中心とする急進派は、武力闘争を展開するにいたった (白川, 2014, p.294) ²³。

カナク (Kanak) とは先住民族メラネシア人を指すが、そのアイデンティティ闘争の歴史は、1960 年代末の解放運動から独立運動を経て、現在に至っている。こうした闘争の中で繰り返し主張され、脱植民地化運動の概念を具現化してきたのが「カナク・アイデンティティの回復要求」(revendication de l'identité Kanak) である。彼らは過酷な植民地化によって、メラネシア人としての人間の尊厳を踏みにじられ、その権利を奪われてきた。その結果、フランスに対して政治的にも文化的にもカナク・アイデンティティの回復を要求しなければ

²² 尾立要子 (2024) 『周辺からの共和主義：「天国に一番近い島」の現在』大阪公立大学出版会

²³ 白川千尋 (2014) 「オセアニア先住民」, 国立民族学博物館編 『世界民族百科事典』丸善出版

ならなかったのである。それゆえ、カナク・アイデンティティは、「土地の人」である先住民族として、国民国家の規範に基づく権利を根拠に、政治的な言説の中で主張されていた。その要求は、状況によって、誰が語るかによっても異なるが、主として、植民地化で奪われた人間としての尊厳、文化、土地、経済の回復、そして最大の要求は主権の回復である。この意味において、カナク・アイデンティティ闘争の歴史は、アイデンティティの形成過程としてよりも、カナクとしての権利回復への過程である。しかしながら、カナク・アイデンティティは、この復権要求が主張される度に、先住民族全体を結ぶイメージとして、また彼らの言葉でいえば、「ピープル」として、あるいはカナクのネーションのシンボルとして、人びとの心に浮かび上がり、表象され、構築されてきたといえよう（江戸，2005，pp.190-191）²⁴。

以上のニューカレドニアにおけるカナク・アイデンティティを取り戻す闘争の歴史を踏まえた上で、カランプーの話に移りたい。カランプーの曾祖父ウィリーは、1931年にパリ郊外で開催され、800万人に上る観客を集めた「植民地博覧会」Exposition colonialeで、「食人種」として展示された一人である。ニューカレドニアからはるばるパリまで展示されるために連れてこられた。

「カナク (Kanak)」と呼ばれる民族である彼らは、女性たちは胸をあらわにすることを求められ、男性たちは「野生の叫び」を挙げるように強制された（陣野，前掲書，p.126）。カランプーは曾祖父の経験を踏まえた上で以下のように述べている。

En 1931, lors de l'Exposition coloniale du Jardin d'Acclimatation, des émissaires français sont allés chercher jusqu'en Nouvelle-Calédonie des « spécimens » kanak. Mon arrière-grand-père était du voyage. Pendant plusieurs semaines, il a été exposé aux yeux des

²⁴ 江戸淳子（2005）「〈ニューカレドニア〉⑩カナクー『ピープル』としてのカナク・アイデンティティ復権運動」綾部恒雄監修，前川啓治，棚橋訓編『オセアニア―講座 世界の先住民族：ファースト・ピープルズの現在―』明石書店

Parisiens, qui venaient l'admirer comme un animal. Beaucoup de Français savent-ils cette histoire, qui est demeurée un tabou au sein des familles kanak? S'ils la connaissaient, s'attendraient-ils encore à ce que je chante la « Marseillaise » ? Je ne le pense pas.

1931年、アクリマタシオン庭園での植民地博覧会の期間中、フランスの特使はカナクの「標本」を探すためにニューカレドニアまで行きました。私の曾祖父はフランスまで旅をすることになったのです。数週間にわたり、彼を動物でも見るような形で鑑賞しにきたパリの人々の目にさらされました。この話はカナクの家ではタブー視され続けていますが、この話を知っているフランス人は多いのでしょうか？もし彼らがそれを知っていたら、それでも私が「ラ・マルセイエーズ」を歌うことを期待するのでしょうか？私はそうは思わない。

(Pitoiset, Anne et Wéry, Claudine avec Karembeu, 2011, p.12、筆者訳)²⁵

カランブーの曾祖父が身をもって経験した「人間の展示」は、「人間動物園」（フランス語では Zoo humain）とも呼ばれ、19世紀後半の万国博覧会から、植民地パピリオンで頻繁におこなわれてきた。19世紀半ばからの万国博覧会の版画、写真、絵葉書を蒐集し、レイシズムを研究している小原真史は、博覧会場に設えられた遠い異国の集落や街路、建築物が再現され、当地の人々（や動物）が動員あるいは展示される空間を、〈ネイティブ・ヴィレッジ〉と呼び、この空間について以下のように述べている。

博覧会における〈ネイティブ・ヴィレッジ〉は、映画やステレオ写真よりもリアルな、「ここではないどこか」を「ここ」で疑似体験するための異国の複製であり、来場客

²⁵ Pitoiset, Anne et Wéry, Claudine avec Karembeu, Christian (2011). *Christian Karembeu, Kanak. Don Quichotte*

の視覚だけでなく触覚・聴覚・嗅覚・味覚までをトータルに刺激する、立体的な「動くジオラマ」であった。

(小原, 2022, p.116) ²⁶

このように遠い異国の地の人々の生活を見せる「人間の展示」がおこなわれることで、西洋の人々は自分たちの好奇心を満たしていた。もちろんそこでは、展示される人間の尊厳（あるいは人権）について考えられてはいなかった。

こうした博覧会での展示を体験した曾祖父の話のカランブーは聞かされて育っており、大嶋の言うように、カランブーは自分たちの民族の記憶を自分のアイデンティティの一部としていたため、「ラ・マルセイエーズ」を歌わなかったと考えられる。また、カランブーは「カナク文化は無視され続けているのに、なぜフランス文化の象徴を支持しなければならぬのか」と述べ、それが「ラ・マルセイエーズ」を歌うことを拒否した理由だと述べている (Pitoiset, Anne et Wéry, Claudine avec Karembou, 前掲書, pp.11-12)。サッカーの国同士の試合という、注目を集めやすく、なおかつナショナル・アイデンティティが発露する場所だからこそ、カランブーがフランス文化の象徴である「ラ・マルセイエーズ」を拒否する行為は、政治的関心をニューカレドニアに向ける絶好の機会であっただろう。フランス代表選手という立場ではあるが、多くのフランス人は自分が育ったルーツであるカナクの歴史を知らず、カナク・アイデンティティの回復要求がまだ果たされていないという葛藤の中、カランブーは自分のアイデンティティを「ラ・マルセイエーズ」を歌わないことで表明し、注目を浴びることで、カナク文化の承認の闘争に参加していることが読み取れる。

²⁶ 小原真史 (2022) 『帝国の祭典 博覧会と〈人間の展示〉』水声社

4.2. カランブーの「カナク文化」

さらに、ここでいうカランブーがいう「カナク文化」というのは、「民族」という枠組みの中のカナク文化にとどまらない可能性がある。というのも、カナク・アイデンティティの回復要求というのは、単に民族としてのアイデンティティを確立することを意味するものではないからである。文化人類学者で、カナク・アイデンティティの研究を行っている江戸淳子は1996年8月21日にニューカレドニアのヌメアで、カナク独立派政党であるFLNKS（カナク社会主義国民解放戦線）党首のワイミタン（Rock Warmytan）へのインタビューを行っている。江戸はワイミタンへのインタビューについて以下のように述べる。

FLNKS 党首のワイミタン（中略）は、「カナク・アイデンティティの回復要求とは、民族としてのアイデンティティを確立することではなく、ネーションとしてのアイデンティティを達成することにある」と筆者に語ったが、（中略）実際、独立派カナクは、民族とはヨーロッパ人など後から移住してきた他のエスニック・コミュニティを指すのであって、我々は「この国のピープルである」と主張する。民族とピープルの違いは、主権や独立に対する自決権を有するか否かであり、カナクが一つの民族グループとして捉えられれば、その合法性を失ってしまう故に、カナクを民族名と定義することを拒否している。

（江戸，2005，pp.197-198）

カナクを民族グループとして捉えるのではなく、「ピープル」という呼び方を採用する理由としては、「ピープル」にはカナクが主権や独立に対する自決権を有するという意味が込められているからである。カランブーがいう「カナク文化」も、いち民族グループとしてのカナク文化というだけではなく、主権をもったピープルとしてのカナク文化という解釈もできるのではないだろうか。それはカランブー自身がカナクの民族アイデンティティを

受け継いでいるならば、ニューカレドニアにおいてカナクが主権を求めて戦い続けてきた歴史というのも彼自身が知るべき民族の過去だからである。カランブーにこのようなカナク・ナショナリズムがあるならば、フランス代表というナショナルチームの一員という立場で、国家斉唱を拒否し、主権や独立に対する自決権を有する「カナク・アイデンティティ」を主張するということが彼自身の役割を感じていた可能性は否めない。

江戸は、1997年9月16日にヌメアでカナク判事であるトロリュにもインタビューを行っており、トロリュの言葉を次のように振り返っている。

唯一のカナク判事であるトロリュ (Fote Trolue) が筆者に語った言葉ほど、この「ピープル」としてのカナク・アイデンティティ復権運動の話を終えるに相応しいものはないかもしれない。「私は、カナク・アイデンティティを要求しなければならなかったが、私の娘が言うことには、『私は常にカナクであったし、カナクであるし、カナクであり続けるのに、何故、私は自分のアイデンティティを要求しなければならないの』と言うんだよ」(中略)。もし、カナクの若者が、今やカナク・アイデンティティ回復要求を主張する必要性を取り立てて感じていないとするならば、それは、カナクが人間としての尊厳と「ピープル」としての権利を回復するために、両親の世代がかくも長きにわたって闘ってきた闘争の結果といえよう。

(江戸, 2005, pp.203-204)

カランブーも含め、何世代にもわたる闘争の歴史がカナクにはあり、江戸のこの本が出版された2005年時点でこのように述べられているが、現在もまだフランスからの独立を求める闘争が終わってはいない。ニューカレドニアでは独立を問う住民投票が2018、20、21年の3回行われ、いずれも独立は否決されている。3回目の2021年の住民投票は、コロナ禍の中で、ニューカレドニアでも死者が出て、伝統的に葬儀に何か月間もかけるカナクは、こ

の状況下では住民投票はできないと反対して投票をボイコットしたが、選挙は強行され、過去2回は8割超だった投票率は4割台にまで下がった。最近でも2024年5月13日に、フランス政府が憲法改正により、現地に10年以上暮らす住民に投票権を拡大する選挙制度改革をしようとしていることに対する独立派のデモや暴動が発生し、フランス政府が非常事態宣言を出すような出来事も起きている。朝日新聞によると、先住民カナクの中には、仏領からの独立を求める声があり、仏系住民に投票権を与える選挙制度の改革は「植民地化」につながるとして抗議デモが起きていたとのことで²⁷、カナクは自分たちの主権を回復できずにおり、「植民地化」という時代をまだ克服できてはいない。フランス植民地史研究者の平野千果子は、2024年の憲法改正による政府の投票権拡大の改革を「植民地支配が過去の遺物ではなく、現在進行形で続いているような状況だ」と指摘している²⁸。未だ独立を果たしていないニューカレドニアでは、ピープルとしての権利を回復する闘いは現在も続いている。

4.3. 1998年W杯優勝における「民族融合」の歓喜とその後

カランブーのようなスポーツ移民と呼ばれる人びとは、故郷のために、自分たちの民族が植民地化によって失ったアイデンティティを取り戻すためにも、スポーツを通じて、故郷の地域社会へ貢献しようとしている。スポーツ人類学を研究する窪田暁は、ポストコロニアリズムの状況を踏まえて、スポーツ移民について以下のように述べる。

²⁷ 朝日新聞「ニューカレドニア、非常事態宣言 暴動深刻化 5人死亡、数百人負傷」2024年05月17日 夕刊 社会総合 10頁, 朝日新聞デジタル, <https://xsearch.asahi.com/kiji/detail/?1736406325428> (2025年1月9日閲覧)

²⁸ 朝日新聞「南の小さな島、進行形の植民地主義 ニューカレドニア、本国フランスは入植推進」2024年07月05日, 朝刊, 20頁, 朝日新聞デジタル, <https://xsearch.asahi.com/kiji/detail/?1736406425731> (2025年1月9日閲覧)

グローバル化の進展とともに世界中に広がる新自由主義経済は、世界各地で社会的
不平等のさらなる拡大を引き起こしている。スポーツ移民の移動経路からも旧宗主
国が圧倒的な経済格差を背景に旧植民地出身の選手を獲得するというポスト植民地
的状況が浮かびあがる。しかしながら、このような困難な状況の中で当事者であるス
ポーツ移民は、経済格差を逆手にとるかたちで資本を獲得し、その富を地域社会の論
理に従い還元しようとしているのである。

(窪田, 2014, p.331) ²⁹

カランブーはニューカレドニアという社会・経済的にマイノリティで弱い立場から、海を
渡りフランス本国に行き、サッカーで成功することで社会・経済的に成功しようとした訳で
あるが、カランブーがフランスやフランス代表を批判しようとも、サッカーで成功をつかも
うとフランスチームに入る行為は自分が成功を掴むことのできる最大の機会を得ようとし
たものであり、その行為は非難するべきものではなく、正当な権利の行使といえよう。ただ、
カランブー自身は、単に経済的な成功のみを求めているのではないことが、次の手記からわ
かる。彼は何らかの形で、ニューカレドニアの地域社会に貢献しようとしているのだ。それ
は、植民地化された、あるいはかつて植民地化されていた民族の承認である。その状況もカ
ランブーにとっては困難な状況であり、長い道のりだということを以下の文から読み取れ
る。

Un long chemin reste à parcourir pour la reconnaissance des peuples colonisés ou anciens
colonisés.

On a cru, en 1998, que cette reconnaissance pouvait passer par le foot, et le foot seulement,

²⁹ 窪田暁 (2014) 「スポーツ移民」 国立民族学博物館編 『世界民族百科事典』 丸善出版

mais c'était une erreur : s'il est un vecteur d'insertion, il ne résout pas tout. Chacun d'entre nous se souvient de la vague d'enthousiasme créée par la victoire d'une France « Blacks-Blancs-Beurs » à la Coupe du monde, et des répercussions sociales qu'elle semblait annoncer. Quatre ans plus tard, Jean-Marie Le Pen était au second tour de l'élection présidentielle ; douze ans plus tard, on expulse les Roms et le gouvernement prône le retrait de la nationalité pour certains délinquants. Cela prouve que quelque chose n'a pas fonctionné, qu'on a laissé faner un espoir. L'esprit de partage dont témoignait la victoire de 1998 aurait dû être cultivé aussi bien dans la société que sur le terrain. Rien n'a suivi.

植民地化された、あるいはかつて植民地化されていた民族が承認されるまでには、まだ長い道のりがある。

1998年、私たちはサッカーを通じて、そしてサッカーだけで、この承認を達成できると考えたが、それは間違いだった。サッカーは社会的編入の手段であるかもしれないが、それはすべてを解決するわけではない。私たちは皆、ワールドカップでの「黒ー白ーブルー」のフランスの勝利がもたらした熱狂の波と、それによる社会的反響を覚えている。その4年後、ジャン＝マリー・ルペンが大統領選の決選投票に進出し、12年後にはロマ人が国外追放され、政府は一定の軽犯罪者の国籍剥奪を奨励している。このことは、何かが間違っていたこと、希望が失われたことを証明している。1998年の勝利で示された分かち合いの精神は、社会とピッチの両方で培われるべきだった。何も続かなかった。

(Pitoiset, Anne et Wéry, Claudine avec Karembou, 2011, pp.12-13、筆者訳)

カランプーは1998年のことを述べているが、これは1998年当時、民族融合を掲げ、悲願のワールドカップ初優勝を成し遂げたフランスのことを指している。「黒ー白ーブルー」

(Blacks-Blancs-Beurs) とは、黒人 (Blacks)、白人 (Blancs)、フランス生まれのマグレブ (アフリカ北西部の地域の称) 系移民 (Beurs) を意味し、1998 年の優勝時のフランス代表、そしてその多民族性やその結合の勝利を象徴的に表した言葉である。

1998 年当時、フランス代表の初優勝によってフランス国内は大いに盛り上がっていた。その状況は以下のようなものである。

まさかの歴史的初優勝。この夜のシャンゼリゼは、一〇〇万人以上の男女で埋め尽くされた。

♪♪ オンネ・レ・シャンピオン、オンネ・レ・シャンピオン、
オンネ、オンネ、オンネ・レ・シャンピオン

(On est les champions, on est les champions, on est, on est, on est les champions !

=われらはチャンピオン、われらはチャンピオン、われらは、われらは、われらはチャンピオン)

と歌い、踊り、発煙筒を焚き、クラクションを鳴らす人々。身動きがとれないほどの人、人、人。ラテンのフランス、人種を超えた移民融合のフランス、個が爆発するフランス、闘うフランス、団結と連帯のフランス。そこには、全てのフランスの魅力がとびっきりぎっしり詰まっていた。

(山本、ランヌ, 2002, p.26) ³⁰

このようなフランスでの盛り上がりのなか、選手自身にインタビューも行われた。ここではワールドカップ優勝時にセンターバックとしてチームに貢献したガーナ出身のマルセル・ドゥサイーに「フランスでの異民族融合」についてインタビューしている箇所を取り上げる。

³⁰ 山本三春、ローラン・ランヌ (2002) 『フランスサッカーの真髄 (エスプリ) ～ブルーたちからのメッセージ～ (Voyage au cœur du football français) 』本の泉社

ーフランス代表チームにとって大変重要な要素は異民族融合だと言われますね。
あなた自身、外国出身であることが重要だと感じていますか？

ドゥサイー「ふふふ。そりゃあ、もう当たり前です（笑）。フランス代表チームが様々なルーツからやって来た選手たちを抱えているという事実が、フランスで熱狂を沸き起こす一つの切り札であることは、もはや明らかですね。我々が様々な場所からやって来ただけに、フランスに住む人々は、代表チームの中に自己のアイデンティティを見出し、同一化することができるのですよ。98年W杯の期間中、それは一層強烈にでましたね。一種の再発見だったのです。長いことこの国にいた移民たちの存在をついに自覚したのです。フランスというかなり強烈なものに対して、同一化がおこなわれた。それこそが興味深いことでしたね」

これを語ったとき、ドゥサイーは不敵な笑みを浮かべた。そう、あのW杯前、フランスに住む黒人たちは、差別に行為してハンガーストライキまでおこなった。それを受けてフランス人も連帯、移民排斥を公然と唱えてきた極右勢力をデモと選挙でやっつけ、翌年W杯に突入した。そして美しい多民族融合の姿をサッカーの中に発見したのである。それは長い間差別に苦しみ、闘ってきた多くの移民階層の汗と涙が結実した一瞬だった。フランス代表チームがもぎ取ったエトワル（星）は、移民階層にとっては“希望の巨星”だった。

（山本、ランヌ，前掲書 pp.234-236）

ドゥサイーが「長いことこの国にいた移民たちの存在をついに自覚したのです」と述べるように、1998年のワールドカップ優勝という成功で、マイノリティであった移民の存在が認識され、承認へと向かい、当時のフランスでは今までの差別を払拭するかのようになり、希望を持って語られていた。しかし、カランプーの「1998年の勝利で示された分かち合いの精神

は、社会とピッチの両方で培われるべきだった。何も続かなかった。」という言葉にあるように、社会とピッチの両方でフランスの社会に差別が根強く残ることが示される結果となった。カランプー自身もサッカーを通じて何かが変わると信じていたからこそ、その落胆を感じたのだろう。2001年9月11日に同時多発テロが起きてから、移民の人々に対する風当たりがきつくなり、カランプーが言っているように2002年、極右政党のジャン＝マリー・ルペンが躍進する。カランプー自身の言葉から解釈するとサッカーはきっかけにすぎず、その後その移民融合を成し遂げたフランスを差別や偏見をなくして努力が続かなければならなかったということだろう。

カランプーのサッカーに対して期待していた言葉や1998年の盛り上がりは、第1章で紹介した浦和レッズ阿部祐樹選手の「差別撲滅宣言」における「サッカーは、社会から差別を撲滅する力を持っている」という言葉でみられる、「サッカー」に社会的な差別問題を託すという構図に類似している。1998年の出来事やカランプーの事例から考えるに、サッカーに力があるのではなく、サッカーは社会における差別の問題を認識するきっかけを与えるものであり、その後の努力なくしては問題は解決していかない。そういった意味で、阿部祐樹選手の「差別撲滅宣言」ではサッカーに期待を寄せるのではなく、その後の社会における努力の継続を宣言するべきであったともいえる。

一方、1998年ワールドカップをきっかけとしたフランスにおける民族融合に期待を寄せるフランスの情勢をけん引した存在として、メディアが果たした役割も大きいといえる。サッカーとヨーロッパ・アイデンティティの関係について研究するリズ・クロリーとデイヴィッド・ハンドは、1998年にメディアが大量の移民に関する情報を流し、優勝したフランス代表の地位を押し上げたことを以下のように説明している。

By the end of the twentieth century, the majority of commentators (inside and outside the media) view the inclusion of ethnic minority players in the French national team as a positive

development. (….) For instance, immediately after France won the 1998 World Cup with its team of blacks, blancs, beurs (blacks, whites and second generation North Africans; (….)), Le Monde and Libération, among many others, treated their readers to a flood of utopian moralizing on the subject of immigration. The mediation of the football team's success elevated it to the status of exemplum, a symbol dispensing invaluable instruction in the lessons to be learnt from French history and politics.

20世紀末までは、(メディア内外を問わず) コメンテーターの大多数が、フランス代表チームに少数民族の選手が加わったことを肯定的な進歩としてとらえていた。(中略) たとえば、フランスが1998年のワールドカップで、ブラック、ブラン、ブール(黒人、白人、北アフリカの二世(中略))のチームを擁して優勝した直後、『ル・モンド』や『リベラシオン』などの多くの日刊紙は、膨大な量の移民のテーマに関する理想主義的で道徳的な説明を読者に提供した。サッカーチームの成功を伝達する媒体によって、そのチームをフランスの歴史と政治から学ぶべき教訓の中で非常に貴重な教えを授けるシンボルとして、模範的な地位へと高めた。

(Crolley & Hand, 2006, p.55、筆者訳)³¹

このようにフランスのメディアやコメンテーターたちが、1998年ワールドカップでフランス代表が多様な民族、人種を擁して優勝を成し遂げたという成功を、フランス社会の理想的なモデルとして大量の情報を読者に流した。メディアが国民に対して報じた情報によって、フランス代表の優勝という盛り上がりの中、このチームにフランス社会の構図を投影して、

³¹ Crolley, Liz and Hand, David (2006). *Football and European identity : historical narratives through the press*. Routledge

社会問題もこのナショナルチームの成功をきっかけに変わるだろうという風潮が出来上がったといえる。

しかし、メディアがそろって、フランス社会の民族多様性を肯定的に報道していったのは、単にフランス代表の優勝をきっかけとするものだけではない。移民排斥を掲げる国民戦線（Front National, 現在は「国民連合」）の指導者ジャン＝マリー・ルペンの1986年以降の躍進に対する反動として、対立する姿勢として描いた一面もあると言える。リズ・クロリーとデイヴィッド・ハンドは、フランスの活字メディアが1990年代後半に民族多様性へのユートピア的イメージを国民戦線への反動として作り上げていったことを以下のように述べている。

Although it was founded in 1972, the Front national did not break through electorally until 1986 when its near 10 per cent of the vote at the general elections saw it receive 35 MPs in the French National Assembly. From that point onwards, the party scored between 10 and 15 per cent of the vote at general and presidential elections, making it one of the top four parties in French politics and providing a platform for its charismatic leader, Jean-Marie Le Pen, to preach a form of nationalist discourse that excluded immigrants and many ethnic minorities from participation in the national family. Indeed, Le Pen even turned his sights on the French football team during the European Championships of 1996 declaring that many of its 'foreign' members did not want, or even know how, to sing the national anthem (*Le Monde*, 25 June). It seems feasible, therefore, to state that print media discourse on football in France appears, in this respect, to operate with an ideological function: to promote a consensus around a shared image of the nation based on the traditional French concept of creating unity from diversity (…). In a way, the euphoric utopianism of the late 1990s discourse on France's 'Blues of all colours' (*Libération*, 10 June 1998) may be read as a liberal (over)reaction against the

depressive dystopian discourse of the Front national on the perils of multiculturalism.

国民戦線は1972年に結成されたが、選挙で躍進したのは1986年の総選挙で10%近い得票率を獲得し、国民議会で35人の議員を獲得してからである。それ以降、国民戦線は総選挙と大統領選挙で10%から15%の得票率を獲得し、フランス政治における4大政党のひとつとなり、カリスマ的指導者ジャン=マリー・ルペンが、移民や多くのエスニック・マイノリティの国家家族への参入を排除する民族主義的言説を説くための基盤を作りあげた。実際、ルペンは1996年の欧州選手権の際、フランスサッカーチームにまで目を向け、「外国人」メンバーの多くは国歌を歌いたがらないし、歌い方さえ知らないと言明した（ル・モンド紙6月25日付）。従って、フランスにおけるサッカーに対する活字メディアの言説は、イデオロギー的な働きを持ち機能しているようだという事ができる。つまり、多様性から統一性を生み出すという伝統的なフランスの概念に基づく、国民が共有するイメージの一致を促すことである（中略）。ある意味で、フランスの「あらゆる色の青」（『リベラシオン』1998年6月10日号）に関する1990年代後半の幸福なユートピア主義的言説は、多文化主義の危険性に関する国民戦線の憂鬱なディストピア的言説に対するリベラルの（過剰な）反動として読むことができるかもしれない。

（Crolley & Hand, 前掲書, pp.55-56、筆者訳）

国民戦線は政治的なアピールとして移民を問題視し、失業や治安の悪化の原因は移民にある、という主張を繰り返してきた。移民排斥と表裏一体を成すフランス国民の優先も党の主な主張となり、フランス人を優先的に雇用するなどの政策を提言してきた（大嶋, 2015, p.60）

32. そのような国民戦線の動向を踏まえた上で、リズ・クロリーとデイヴィッド・ハンドは、フランスの日刊紙が、フランス代表がワールドカップ優勝を成し遂げたあたりの1990年代後半に民族多様性に対して肯定的なユートピア的言説を報道していったのは、移民やエスニック・マイノリティを排除する意思をもつ国民戦線へ反対する主張であったとみることができるとしている。このような観点から見ると、メディアによって多様性に対する肯定的な観念が意図的に植え付けられており、実際には移民排斥を主張する国民戦線の躍進は以前から進んでおり、カランブーが落胆するような状況は以前からフランス社会において起きている。こうしたフランス社会の状況があったうえで、サッカーを通じて何かが変わるのではないかという期待を抱くことになったことがわかる。

4.4. カランブーの事例から陣野による議論の再検討

以上のように第4章ではカランブーの言葉を中心に彼自身が抱えるニューカレドニアのカナク・アイデンティティや植民地主義の過去を見てきたが、第3章で述べた陣野のサッカーにおける人種差別問題の解決策についての話に戻りたい。第3章で陣野氏は「人種差別の歴史的経緯を把握すること」と、「コスモポリタンの在り方をレッスンすること」を差別的行為に対抗するすべとしているが、この2つはうまく共存できるのだろうか。まず、歴史的経緯を把握することはカランブーのような事例を目にすることでもある。カランブーのような強いアイデンティティ意識をもつ選手の在り方は、陣野氏がコスモポリタンの対蹠地にあるとして批判する共同体主義的な考え方に近いといえる。またそれは、陣野氏が提唱する、オシムをお手本とした他人から押しつけられたアイデンティティを拒み、自分でもアイデンティティを課さないコスモポリタンの在り方とは対立している。さらに、カナク・アイ

³² 大嶋えり子 (2015) 「コラム1 国民戦線の勢力拡大と言説の変化」, 中野裕二、森千香子、エレン・ルバイ、浪岡新太郎、園山大祐 編著『排外主義を問いなおす：フランスにおける排除・差別・参加』勁草書房

デンティティのような民族の歴史と自分たちのアイデンティティとが強固に結びついている場合を知ると、アイデンティティを排すような極端なコスモポリタニズムは、当事者にとっては暴力的な過去の忘却につながると考えることもできる。よって、歴史的経緯を把握すればするほど、サッカー選手個人個人がもつ共同体に対する強いアイデンティティや愛着を持った事例に触れるため、コスモポリタニズム的なあり方を疑問視せざるを得なくなってしまう。

フランスにおけるマイノリティをめぐる言説や移民の記憶や社会への統合について研究してきた大嶋えり子は、「ジェノサイドや、人道に対する罪、植民地支配、戦争犯罪などをはじめとする国家が主体となる行為や政策は筆舌に尽くしがたい苦痛を多くの人々に強いてきており、被害者や被害者の子孫はその過去を強烈な経験として記憶し、自らのアイデンティティの一部とする」と述べている。また、「被害に遭った経験自体が、自らが誰なのかを規定するようになる」と述べている。³³ (大嶋, 2022, p.3) カランブーの植民地博覧会での曾祖父の体験を語る言葉からも垣間見えたが、カナクたちがフランスによる植民地支配の歴史を通して、カナク・アイデンティティを作り上げてきており、その支配の歴史を自分たちのアイデンティティの一部にすることは、大嶋のいう、被害に遭った経験自体が、自らが誰なのかを規定するという事に当てはまる。

先ほど、「アイデンティティを排すような極端なコスモポリタニズムは、当事者にとっては暴力的な過去の忘却につながると考えられる」と述べたが、過去の忘却について大嶋は、清原悠が歴史的な文脈が無視・否定されることで、反差別の規範の重要な拠り所が失われてしまう危険性を指摘した例をあげ³⁴、以下のように述べている。

³³ 大嶋えり子 (2022) 『旧植民地を記憶する フランス政府による〈アルジェリアの記憶〉の承認をめぐる政治』吉田書店

³⁴ 清原悠 (2015) 「歴史修正主義の台頭と排外主義の接続—読売新聞における『歴史認識』言説の検討」山崎望編著『奇妙なナショナリズムの時代—排外主義に抗して』岩波書店, p.70

本書で使用している用語に置き換えれば、意識的かどうかは別として、植民地支配の記憶を忘却することは植民地政策における被支配者とその子孫への差別を引き起こすとする主張である。また、マジョリティとマイノリティへの言及が示すように、過去及び現在における集団間の序列や権力関係といったアクター間の複雑な関係にまなざしを向けることが、差別への抵抗において不可欠なのである。

(大嶋, 2022, p.59)

大嶋のいうアクター間の複雑な関係にまなざしを向けることは、当事者の言葉に耳を傾け、その背景にある集団の歴史に目を向けることであるため、陣野のいう歴史的経緯を把握することだと言い換えられるのではないか。

以上のことから、陣野の提唱する人種差別の歴史的経緯を把握することと、アイデンティティをもたないコスモポリタンでいることは共存するのが難しいと考えられる。陣野がアイデンティティを完全に否定している訳ではないにしろ、アイデンティティを排するような安易なコスモポリタニズムは、過去の忘却につながり、さらなる差別を生む危険を孕んでいるのではないだろうか。

終章 まとめと考察

サッカーは単なるゲームとして以上に、勝敗を争うなかで人々の感情を揺さぶる機能を持っている。それは第2章「メディアとサッカー」においてみたように、現代ではメディアを通してサッカーに関する言葉や映像によって、人々の感情が喚起され、その盛り上がりにより自分自身が感化されていく状況であることから分かる。さらに「サッカー戦争」の例で見たように、サッカーという言葉の持つ力によって、人々がそこに引き付けられ、自ずと注目し

てしまうことから、サッカーはメディアや政治に利用されていく。それによってサッカーが原因でない出来事も、あたかもサッカーが原因であると語られるようなフィクションの要素が盛り込まれることもある。第3章4項で千田有紀の「ナショナル・アイデンティティの基盤にあると考えられる「共通性」は、ある種のフィクションであるということである」という言葉を紹介したが、「サッカー戦争」のような国際試合やワールドカップといった基本的に国同士で戦う状況になると、ナショナル・アイデンティティの問題とも関わってくる。そのため千田の言葉から考えるに、国を代表して戦うサッカーナショナルチームを応援する時、基盤とする「共通性」があるが、そこにはフィクションの要素もある。そのフィクションの要素が、政治的に利用されたり、メディアやSNSから得られる情報により煽られる高揚感もあり、現実のものと混同していき感情移入していく可能性がある。サッカーはスポーツであり一つのゲームに過ぎないが、メディアや政治との結びつきによって、強い国民主義的な感情を作り出し、時には排外的な思想や行動が生じていく可能性もあるのではないだろうか。

そこから先に、実際は何が起きているかを見るには、「サッカー」に関すること以外にも目を向けていく必要がある。「サッカー戦争」の事例でいうと、サッカーという言葉に引張られすぎず、ホンジュラスとエルサルバドルの社会的な緊張関係に目を向け、実際の戦争の理由をたどっていくことになる。また、第4章のカランブーの例では、カランブー自身は一人のサッカー選手として活躍し、注目を集める人ではあるが、そこから彼自身のアイデンティティや生い立ちなどから見えてくるものは代々受け継がれている植民地時代の記憶であったりする。それらはサッカーという観点だけからでは語れないものであり、彼らのプレーを見ているだけでは到底理解はできない。スタジアムで起こる人種差別の問題に関して、そこにはサッカーが関連しているかもしれないが、その奥にある、社会的ダーウィニズムや植民地主義といった背景を理解していくことが必要だろう。

カランブーがいう1998年ワールドカップでの「黒-白-ブルー」といわれる民族融合の

フランスの勝利がもたらした熱狂の波があとに続かなかったことも、多くの人々がサッカーで起きた出来事に注目し、サッカーに対して期待しすぎた結果といえる。サッカーという大きなスペクタクルに飲み込まれると、安易な期待が働いてその後落胆するという道をたどることになる。また、世界的に人気の高いサッカーにおいても、1998年以降のフランスでの失敗の事例は、国境を越えて各国のサッカー界に知れわたっている訳ではない。第1章の阿部勇樹の差別撲滅宣言のように、その後もサッカーに差別をなくす力があると期待するような姿勢というのは変わっていない。4章3項でも述べたように、サッカーに力があるのではなく、サッカーは問題を認識するきっかけを与えるものであり、その後の努力なくしては問題は解決していかない。サッカースタジアムでの差別主義者が起こしている問題にとどめず、社会全体の問題として認知していく必要もあるだろう。

こういった出来事の背景を理解していく作業は、3章2項での陣野俊史のいう「歴史的経緯を把握すること」である。そこで述べたように、わざわざ歴史的経緯を把握しようとするのは、排外主義的な行為を行う人たちではなく、スタジアムで起きるような人種差別行為に違和感を持ち、この行為が起きる背景を知りたい、といった人に限られていく。そのため絶大な効果を持っているとは考えにくく、さらに歴史的経緯を把握することは問題を考える上でのきっかけにすぎないともいえる。けれどもそのきっかけによって、サッカー以外のところに目を向けられる可能性も生まれていき、サッカー選手個人個人が発する社会に対するメッセージや、行動の背景に関心を寄せることができるのも、サッカーのもつ人の興味を引く力によるものといえる

サッカーの注意を喚起する力や、サッカーの情報がマスメディアやSNSで拡散されていくことから、人種差別や植民地主義といったことに興味をもつ「入口」としての役割はサッカーに期待できる。選手一人一人の個人史や、なぜバナナがスタジアムで投げ入れられるのか、そういった部分に興味をもつきっかけは、SNSやメディアで拡散されていくサッカーの情報によって得られる可能性が高い。多くの情報は消費され忘れ去られていくかもしれ

ないが、第1章のヴィニシウス選手のインスタグラムや、カランブーや陣野の本のように、選手個人の発信やそれにまつわる話を見る機会が少ないわけではない。また3章1項でのSNSに#WeAreMonkeysのハッシュタグをつけて差別を無効化するムーブメントのように、サッカーファンも選手と共に、SNSなどで差別と闘う発信を行っている。サッカーにおける人種差別問題についても、サッカーに限って差別問題が起きる、サッカーというスポーツだから差別的なことが起きるとはいえないが、サッカーはそういったことを知るきっかけが無数に散らばっているといえる。

最後に人種差別に対する問題を発信するサッカー選手として元フランス代表のリリアン・テュラムを紹介したい。彼はフランスの1998年ワールドカップ優勝時に主力選手として活躍し、同国歴代2位代表戦出場数記録を持つ。テュラムは人種差別に対して積極的な取り組みを行っており、差別と平等に対する個人的な取り組みを行動に移すために、人種差別に反対するリリアン・テュラム教育財団 (Fondation Lilian Thuram) を設立した³⁵。テュラムは人種に対する偏見をなくしていくには、一般大衆に先入観や前提条件を見直すための説明を行う必要があると以下のように述べる。

Il reste beaucoup à faire pour éliminer les préjugés. (中略) Mais je ne me fais pas trop d'illusions. Il faudra plus d'un livre, plus d'une conférence pour renverser les idées reçues, pour effacer le complexe de supériorité de certains Blancs vis-à-vis des Noirs, et le complexe d'infériorité de certains Noirs vis-à-vis des Blancs.

Pour gagner ce combat, il faut démonter les présupposés. Expliquer que ces idées découlent de trois siècles d'esclavage, de la période de colonisation et de la classification des races selon

³⁵ Fondation Lilian Thuram 《BIOGRAPHIE DE LILIAN THURAM》
<https://www.thuram.org/biographie-de-lilian-thuram/> (2025年1月4日閲覧)

laquelle le Noir était moins bien considéré qu'un animal³⁶.

Le grand public n'est pas obtus. Lorsqu'on prend la peine de lui donner des explications, il écoute et modifie son jugement.

偏見をなくすためになすべきことはまだたくさんある。(中略)しかし、私はあまり幻想を抱いていない。先入観を覆し、一部の白人の黒人に対する優越感や、一部の黒人の白人に対する劣等感を消し去るには、1冊の本や1回の講演会だけでは足りないだろう。

この戦いに勝つためには、前提条件を解体する必要がある。こうした考え方は、3世紀にわたる奴隷制度、植民地化の時代、黒人が動物よりも低く評価されていた人種分類に由来するものだと説明される。

一般大衆は鈍感ではない。手間をかけて説明すれば、彼らは耳を傾け、判断を変える。

(Jean-Yves Guérin, Laurent Jaoui. Preface de Lilian Thuram. pp.13-14、筆者訳)³⁷

このようにテュラムは、先入観や前提条件となる奴隷制度、植民地化の時代といった歴史を、一般大衆に手間をかけて説明すれば、耳を傾け、判断を変えるという。十分に理解されるかは別にして、このように差別に対して着実に対処していくというメッセージを発している。テュラム以外にもサッカーに関わって来た人たちが差別や偏見の問題に対して、自分たちの考えを述べており、本稿にでてきたカランブーも自分のアイデンティティを表明しつつ、その問題について考えを発信する一人である。彼らの言葉に耳を傾けることは、サッカーを

³⁶ ここで原著注として、Code noir de Colbert, en 1685 (黒人法, 1685年にフランス王ルイ14世が発布した勅令)を参照せよとある。

³⁷ Guérin, Jean-Yves et Jaoui, Laurent (2008). *NOIRS EN BLEU Le football est-il raciste ?*. Anne Carrière

通して社会的な差別に迅速に対処し、できる限りそれを抑え込む力を培い、次の世代へと差別との闘いの歴史を引き継ぐ一つの手だてとなっていくのではないだろうか。

参考文献

(書籍・論文)

伊藤めぐみ(2007)「いわゆる『サッカー戦争』(1969年)をめぐって - ホンジュラス・記憶の政治学の試み -」『貿易風』2, 2007-04 中部大学国際関係学部, pp. 261-285

今田高俊 (2010)「コミュニタリアニズム-エツィオーニ他」日本社会学会, 社会学事典刊行委員会編『社会学事典』丸善

江戸淳子 (2005)「〈ニューカレドニア〉⑩カナク『ピープル』としてのカナク・アイデンティティ復権運動」綾部恒雄監修, 前川啓治, 棚橋訓編『オセアニア―講座 世界の先住民族: ファースト・ピープルズの現在―』明石書店

エリック・ロバートソン・ドッズ著、見市雅俊訳 (1990)「進歩の観念 (古典古代における) Progress in Classical Antiquity」フィリップ・P.ウィーナー編、荒川幾男ほか日本語版編集『西洋思想大事典 Dictionary of the History of Ideas 2』平凡社

エルネスト・ルナン, 鵜飼哲訳 (1997)「国民とは何か」、E.ルナン[ほか]著, 鵜飼哲[ほか]訳『国民とは何か』インスクリプト

大嶋えり子 (2015)「コラム 1 国民戦線の勢力拡大と言説の変化」, 中野裕二、森千香子、エレン・ルバイ、浪岡新太郎、園山大祐 編著『排外主義を問いなおす: フランスにおける排除・差別・参加』勁草書房

大嶋えり子 (2022)『旧植民地を記憶する フランス政府による〈アルジェリアの記憶〉の承認をめぐる政治』吉田書店

尾立要子 (2024)『周辺からの共和主義: 「天国に一番近い島」の現在』大阪公立大学出版

加藤哲郎 (1994)「コスモポリタニズム」秋庭隆編『日本大百科全書 9』(第2版) 小学館

清原悠 (2015)「歴史修正主義の台頭と排外主義の接続―読売新聞における『歴史認識』言説の検討」山崎望編著『奇妙なナショナリズムの時代―排外主義に抗して』岩波書店

窪田暁 (2014)「スポーツ移民」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』丸善出版

白川千尋 (2014) 「オセアニア先住民」, 国立民族学博物館編 『世界民族百科事典』丸善出版

陣野俊史 (2014) 『サッカーと人種差別』文春新書

スラヴォイ・ジジェク著, 鈴木晶訳(2008) 『ラカンはこう読め』, 紀伊國屋書店

千田有紀 (2010) 「ネーション・ビルディングとナショナル・アイデンティティ」日本社会学会, 社会学事典刊行委員会編 『社会学事典』丸善

野家啓一 (1994) 「アイデンティティ identity」渡邊静夫 『日本大百科全書 1』(第2版), 小学館

馬場伸也 (1994) 「コスモポリタニズム」見田宗介ほか編 『[縮小版]社会学事典』弘文堂

ピーター・P.トリフォナス著, 富山太佳夫訳 (2004) 『エーコとサッカー』岩波書店

フランク・B・ギブニー編著 (1993) 『ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典4』(第2版改訂), ティビーエス・ブリタニカ, p.926

毛利嘉孝 (2015) 第13章「ポストメディア時代における文化政治学へ向けて」, pp.344-345, 石田英敬, 吉見俊哉, マイク・フェザーストーン編著 『デジタル・スタディーズ3 メディア都市』東京大学出版会

山本三春, ローラン・ランヌ (2002) 『フランスサッカーの真髄 (エスプリ) ～ブルーたちからのメッセージ～ (Voyage au cœur du football français) 』本の泉社

リシャルト・カプシチンスキ (1993) 『サッカー戦争』中央公論社

Crolley, Liz and Hand, David (2006). *Football and European identity : historical narratives through the press*. Routledge

Guérin, Jean-Yves et Jaoui, Laurent (2008). *NOIRS EN BLEU Le football est-il raciste ?*. Anne Carrière

Pitoiset, Anne et Wéry, Claudine avec Karembeu, Christian (2011). *Christian Karembeu, Kanak*. Don Quichotte

(Web サイト)

朝日新聞「(W杯という挑戦 開催国・南アを行く:下) 市民 停滞脱出のきっかけに」2009年07月02日, 朝刊, スポーツ3, 17頁, 朝日新聞デジタル
<https://xsearch.asahi.com/kiji/detail/?1736405857498> (2025年1月9日閲覧)

朝日新聞「ニューカレドニア、非常事態宣言 暴動深刻化 5人死亡、数百人負傷」2024年05月17日 夕刊 社会総合 10頁, 朝日新聞デジタル
<https://xsearch.asahi.com/kiji/detail/?1736406325428> (2025年1月9日閲覧)

朝日新聞「南の小さな島、進行形の植民地主義 ニューカレドニア、本国フランスは入植推進」2024年07月05日, 朝刊, 20頁, 朝日新聞デジタル
<https://xsearch.asahi.com/kiji/detail/?1736406425731> (2025年1月9日閲覧)

毎日新聞「フィールドの向こうに:サッカー戦争=田原和宏」2022年7月14日 東京夕刊, 2頁, 総合面, 毎索
<https://dbs.g-search.or.jp/aps/WSKR/main.jsp?ssid=20250109160258694gsh-ap03> (2025年1月9日閲覧)

ヴィニシウス選手インスタグラム投稿文 (2023年5月22日付)
https://www.instagram.com/p/CshKhcAo9K_/?igsh=MXU5cHplb2ZyYW5mNA== (2024年10月1日閲覧)

Fondation Lilian Thuram 《BIOGRAPHIE DE LILIAN THURAM》
<https://www.thuram.org/biographie-de-lilian-thuram/> (2025年1月4日閲覧)

URAWA RED DIAMONDS OFFICIAL WEBSITE 「差別撲滅に向けて 阿部勇樹」
<https://www.urawa-reds.co.jp/topteamtopics/%E5%B7%AE%E5%88%A5%E6%92%B2%E6%BB%85%E3%81%AB%E5%90%91%E3%81%91%E3%81%A6-%E9%98%BF%E9%83%A8%E5%8B%87%E6%A8%B9/> (2025年2月17日閲覧)